

音雪

kou

旅の果て

様々な人と出会い、様々な土地を歩き、様々な風景を横目に視認するという事は、己の、いや、私自身の見聞を広げる。ときには書物を読みふけり、難解な漢字が出現した際には困惑の表情を、私は浮かべる。現代のデジタル社会に反するかのように、電子機器は持たず、さらには辞書すら手元にはない。

なので旅を生業にしている私にとって、年月が経過する度に、友、の数は減っていく。かつて同じ空間で教科書にいたずら書きをし、異性の話して盛り上がり、音楽を奏で合い、お勤めの漫画を交換し合った友の姿を、海風を肌を感じながら、私は思いに身を馳せる。

あれは一ヶ月前の出来事だった。日本列島を北から南下し、旅をはじめ既に十年が経過していたときだ。高校の同級生である、有村真治に出会った。私はいつものように方向音痴が姿を表し、迷いに迷ったあげく、気づけば森の中を彷徨っていた。目元に手を翳したくなるような陽光は成りを潜め、辺りは暗く、空気の暖かみは消え、肌寒い風が私の全身を射抜いていた。喉はからからに渴き、靴は摺りへり、二日前にお風呂に入ったシャンプーの爽やかな匂いは全身から消えていた。枯れ葉を踏み、生い茂る葉が風に靡く音だけが、私の耳奥を刺激し、生を感じさせ、内奥を鼓舞した。

しかし、私は飢えと渴きから、目の前が残像を示し、膝から崩れ落ちた。いや、正確にはどんな風にして意識が遠のき土壌の上に倒れたのかは定かではない。崩れ落ちたと言え、それ相応の演出効果がでるのではないか、と思った次第である。

目を開けたとき、そこは土壌ではなく、温かい小屋の中だった。暖炉には薪がくべられ、火の粉が弧を描き宙を舞い、パチパチと小気味良い音を鳴らし、空気と同化した。

「起きたか」

私は重い瞼を開き、虚ろな思考をクリアにせざるを得なかった。なぜなら、その声の主が有村真治だったからだ。

「有村！」

私は思わず声を張り上げ、上体を起こそうとするが、自分の意志とは反し体は思うように動かなかった。

「無理をするな」と有村は不適な笑みを浮かべ、「お前、飲まず食わずで何をしてたんだ？」と、手に持っていたお盆を私の側に置いた。お盆の上には、おにぎりが二個と、沢庵、湯気を醸えた湯飲みがのっていた。

「旅をしているんだ」

私の発した言葉に対し、有村は無言だった。高校のときから変わらずのポーカーフェイスである。月日は経てど、彼の容姿に変化は見られない。むしろあの頃より生気が漲っている感じがする。陰を感じさせるふわりとしたミディアムヘア。長めの前髪から覗く切れ長の目、眉。それらが雰囲気も相まって、彼を取り巻く深い陰を増長させている。着物を着ているが、紐を解けば端正な肉体が露出するであろうことは、時折ちらつかせる手首周りの筋肉を見れば一目瞭然だ。

音は回帰と怪奇をもたらす

「ギターは弾いてないのか？」

私は訊いた。というのも高校時代の私達はバンドを結成していた。メンバーは他に二人いた。こんな記憶も蘇ってくる。「有村！そこはCではなくDのがいいんじゃないか？」友人が曲作りの際にギターコードを有村に指摘する。「いや、Cのがいい。Cコードの構成音、ドミソは不変だ」有村はCコードをギターで奏で眉を潜め、弾く手を止め、友人を凝視した。「君の家族の雪は固まっている。溶かさなければならない」私は口をぽっかりと開け、その光景を眺めていた。その場にいた全員が私と同じ状況だったであろうことは想像に難くない。それでもいつもと変わらぬ独自の雰囲気醸しながら有村はギターを掻き鳴らしていた。それはどこか心を落ち着かせるような、優しさと柔らかい音色だった。そう、新雪のように。後日、友人から、「実は……」と私に耳打ちさせられた。有村に、『君の家族の雪は固まっている。溶かさなければいけない』と言われた人物だ。どうやら友人の両親は離婚をするかしないかの瀬戸際だったらしいが、有村に指摘された直後に家に帰ってみると、両親は雪解け水のように和解し、食卓には大好物のチキンとマカロニサラダが並んでいたということだ。その事実を涙ながら友人は私に語った。要するに家庭内に固まっていた雪が眩いばかりの日光を浴び、溶けたのだ。

「ギターは弾いている」

私の思考は突如現世に呼び戻される。

「久々に聞きたいな。有村が奏でるギターを」

その言葉に有村が鋭い目つきを私に返した。その目は鷹のように鋭かった。その目が言いたいことは、本当にお前はいいのか、と問われている気がした。

有村は襖を開け、一本のギターを取り出した。それは高校時代から使用している物であり、明らかに最近も弾いている形跡があるものだった。なぜなら、ギターボディはワックスが塗られた跡があり、艶やかな光沢が室内灯と共鳴していたからだ。

「弾くのか？」

私は訊いた。が、彼の返事はない。有村という人間とコミュニケーションをとるときは、手話がいいのか筆談がいいのか、と悩んだ時期もあったが、私はこう考えることにした。彼の思い、考え、感情を理解するのに手っ取り早い方法は、音楽なのだ。

そう、音楽。

有村は筆で描いたような唇をきつく結び、胡座をかき、ギターを構え、Cコードをジャラーンと弾き、手首のスナップを巧みに使い、やさしく弾いた。その音色を耳に侵入させながら、私はあることを思った。

彼は一体ここで何をしているのか、と。

もちろん答えは見いだせない。提示されている情報は少数であり、有村に尋ねようにも彼は既にギターを弾いている。その音色はどこか冷たく、私の心に深く浸透してくる。奥深くにある過去を、悲涙を、嘆き、と抉りだすかのように。

「なるほど。お前も固まっているから旅を」

有村は私をちらっと確認し、また手元のギター弦に目を向けた。

ほのかに冷たく温かい音雪

その時だった。

彼の目配せが合図かのように、目の前が飢えとは違う、揺らぎと歪みを発生させた。有村が奏でる音は冷たい。一音、一音を正確に、しっかりと刻む。どこか違う場所に向け、弾いてる。彼の視線をここではないどこかへと投げかけられているように遠くを見つめていた。私の目の前の歪みから、しとしと、と何かが降り注ぐ。

雪だ。

冷たい雪。私は手を広げ、雪の冷たさが皮膚に多数降り注ぎ、形を造り、輝きを放ち、それが人になった。

女性だ。

それもよく知っている女性。私が愛した女性。不慮の交通事故に遭い、この世から消えてしまった女性。私の、帰り、がもう少し早ければ、事故は起きなかった。

「ありさ」

私は凍えるような声で言い、彼女の頬に触れた。人肌特有の温かみを手の平に感じた。

「あなたは悪くない。後悔だけで人生を無にしないで。これからよ。そして、私は、あなたの側にいる」

彼女は綺麗な歯並びをのぞかせた。その笑顔が私の凝り固まっていた心を溶かし、目の前のありさも徐々に溶けていった。私がありさの頬に触れていた部分は液体になったが、それは温かった。

「溶けたようだな」

有村のドライな声が終わりを告げ、音も終わりを告げた。

「ありがとう」

私は感謝の言葉を口にしていた。なにがなんだかわからないまま。彼の奏でるギターに秘密があるのだろうか、確信が持てない。それに雪が室内に降るだろうか。現実的に考えればそれはあり得ない。

「雪が降るな」

そう有村は言い、窓の方をちらっと外をちらっと確認し、すぐに視線をギターに向けチューニングを合わせた。私の手の平はありさの温もりが残ったまま、その手を自分の頬にあてた。

「君は一体何者なんだ？」

私の疑問に有村はチューニングを合わせていた手を止めた。

「お前はおかしなことを訊くんだな。高校の同級生じゃないか。まあ、食え」

有村はお盆を指差した。私もお盆に目を向けた。おにぎりには雪の欠片が付着し、湯飲みからは先ほどまでの湯気は消えていた。

私は有村に視線を向けた。

「しかし、今の、今の現象は」

私がそこまで言ったとき、有村が右手で制した。

「治癒してるんだ」と彼は今までに無い透き通る声で言った。「音を通して、埋めたり、つないだり、ほぐしたりしている。音にはそういう力がある」

私は喉が渇いた。有村の言葉を反芻する内に、口内は砂漠化し、頭の中はわけがわからなくなった。思考が混乱しているのかもしれない。お盆の上にある湯飲みに手を伸ばし、一口飲んだ。それは雪のように冷たかった。